

〔古今要覽稿草木〕はしばみ櫟

はしばみ灌木にして、大なる物とても、七八尺より長きはなし、一株より叢生して繁茂す、花は未秋葉の落ざる時より萌して、極月の頃五六分になりたる時より插花に用、是もながはしばみは花も長じ、共にひらくは啓蟄より春分にいたりて、鮮黃にして、凋にいたつて褐色にいたる、後葉を生ず、是も其芽は深紅にして、長すれば青し、此葉節多くして皺の如し、故には亥ばみといへり、たれさがる花も多くあれども、是は花實時を同ふせず、實を結ぶものは元より花をなさず、五月の頃小なる苞を生じて、七八月に至て熟す、近郷にては下總小金つゝきの山野に自生するものは十果皆實のりて、空殻なるは稀なりといへり、

〔重修本草綱目啓蒙二十一〕櫟 ハシバミ 和名抄

一名葵栗 通雅

任城果名法言

女贊 同上

得眼

記  
佛國

櫟又樺ニ作リ櫟ニ作ル、共ニ通雅ニ出、此木庭院ニ多ク栽ニ、東北ノ山野ニハ自生多シ、高サ丈許、冬ハ葉ナクシテ、小穗ヲ節ゴトニ兩兩下垂ス、形華機ノ如ク、長サ一寸許、闊サ二分許、淺褐色ニシテ赤楊イチヨウ蓄ニモ似タリ、春ニ至リ開ク時ハ、形長大ニシテ黃色ナク、花謝シ、三月ニ新葉ヲ出ス、形圓ニシテ五ノ短尖アリ、周邊ニ鋸齒アリ、皺紋多シ、故ニハシバミト呼ブ、大サ三四寸互生ス、山中ノ自生ハ葉中ニ紫斑アリ、實ハ新枝ノ梢ニ生ズ、大サ茅栗シバグリノ如ニシテ圓尖淡白色、下ハ薄葉ヲ以テ包ム、萼ハ大ニシテ實ハ小シ、殼ヲ去レバ内ニ白仁アリ、生食スレバ味栗ノ如シ、然レドモ仁ナキ者多シ、故ニ十櫟九空ト云、一種ナガハシバミハ山中ニ生ズ、葉狹長實形長ク樅實ニ類ス、凡ソ櫟ハ寒國ヲ上トス、奥州羽州ニ多シ、數品アリ、良ナル者ハ皮薄ク仁多シ、唐山ニハ新羅ノ產ヲ上トス、今韓種ノ櫟アリ、

〔饅頭屋本節用集波木櫃〕